

呑川レポート2011-21号 呑川工事稲の生長打水産卵

大型の台風が、東京では大事にならずホッとしています。

先日（2011/7/20）、久しぶりに東京都庁へ出掛けました。



JR 新宿駅西口を降りて、地下道を出るとケヤキ並木が現れてホッとします。
東京都庁も、緑と重ね合わさってこそ美しいとおもいます。

都の河川部を、福井さん、菱沼さんと一緒に訪れたのは、呑川の今後の改修予定をお聞きするためでした。
結論としては、現在の改修工事（芹が谷橋付近と、道々橋付近の2カ所）が完了すると、当面は予定がないそうです。

ただ護岸をいじるわけではありませんが、河川の整備は続けられています。
現在は、夫婦橋付近で「液状化対策」として、護岸が倒れないように河床の地盤改良工事が

進められています。

「液状化対策」工事の次には、河床の掘削工事が予定されています。
長い間に土砂はたまっていますので、50mm 降雨対策に見合う計画高の河床にするため、
河床が掘られます。

「養源寺橋」付近から下流が、その対象地域になるそうです。
といっても、まずは液状化対策が全面的に終わってからですから、5年以上は先になります。

こう聞くと、それまでに、時間当たり 50mm 以上の降雨があったとき、「洪水」の心配は無いかと

気になってしまいます。

ただ、この地域は「高潮対策」区間でもあります。

この地域の川の水の高さは、「潮の干満」で決まり、過去最大の台風と満潮が重なったときの

水位に対応する護岸は、すでに出来上がっています。

「時間雨量 50mm 対策」より、「高潮対策」の方が大きいので、治水上の心配は無いそうです。

さて今回は、先月初めに報告した「田んぼ」のその後についてレポートします。

「おおたく環境探検隊」がおこなっている「みんなの田んぼ」事業 2011 は、ほぼ月に 1～2 回の

ペースで作業が進められています。



場所は、「水と緑」の象徴的な公園「田園調布せせらぎ公園」の一角です。

参加者が集まる前の時間を利用して、我々スタッフがアゼの補修工事を行いました。
ただ、見ての通り、午前中は日当たりの良くない部分があり、悩みの種でもあります。



現代の名工・人間国宝・堀江師匠が、稲ワラを使って、みごとな「縄ない」の技を披露します。



ステキなワザに惚れたのか、若いお嬢さんも弟子入りして、さっそく「縄ない」を始めます。



子どもたちもワラの束をいじって、何かを始めました。
「縄ない」ではありません。



こちらでは、シャツの中にワラを詰めています。
いったい何をしているのでしょうか・・・



ここまで出来上がってくると・・・そうです、「かかし作り」なんです。



かかしの頭の位置は、大人の高さほどもあり、子どもたちが描いた頭を大人が付けます。



その間に子どもたちはしゃがみ込んで、かかしの胴のワラがバラバラにならないように、包帯でグルグル巻きにします。

みんなで、一緒に作業をするのは、本当に楽しそうです。

(出来上がりは、最後の写真で・・・)



「かかし作り」が終わって、今度は稲の健康チェックのお勉強。

「結の里」新潟県十日町の臼井さんが講師となって、やさしく説明をしてくださいました。



臼井さんが たった1本の苗から育てたバケツ田んぼ・・・
その1本から、もう20本にも「分けつ」しています。

茎の根元付近の幅を計ったら、約9mm・・・これ1本から約90粒のお米が出来るそうです。
最終的には約10mmになるそうで、そうなれば約100粒のお米が出来るそうです。

さてこの「分けつ」ですが、30本くらいになるそうです。
100粒が30本あれば、3000粒・・・これでおにぎり1個分くらいだそうです。
たった一粒の種籾を育てて、3000粒にもなる・・・これがお米の驚異です。

ところで「分けつ」は放っておいたら、60本くらいまで増えてしまうそうです。
しかし、そんなに増えると栄養は分散し、しっかりとした実は付かないといいます。
弱々しいお米の粒は、病気にもなりやすく、虫にも食われます。

ですから、30本くらいで「分けつ」を止めるには、水を落とす「中抜き」が必要で、
土を乾かしヒビが割れるようにすれば、酸素が土に供給され、バクテリアの活動も
盛んになり、より栄養が行き渡り、充実したおいしいお米が出来るそうです。

そういうことをしない、愛情を掛けないでほったらかしのお米は、弱々しいだけでなく、病気にもなり、それでも放っておくのは虐待に近いのだそうです。
お米が健康に育つように、愛情としつけが大切だと臼井さんは強調します。

お米の健康は、「分けつ」を見るだけではありません。
葉の色が黄緑では栄養不足、濃すぎる緑は栄養過多なのだそうです。
ちょうど良いキラキラした緑色の葉は、葉の裏をこすってみると、ぼさぼさの毛が肌に刺さるような抵抗を受けます。
そういう葉は、害虫も、ばい菌もはねつけるそうです。



じっさい、臼井さんのバケツ田んぼにも、こんな斑点が付いていました。
これは「いもち病」だそうです。
「いもち病」になると、「白い斑点」が付くのだそうです。
ところが、丈夫に稲を育てると、その病気を自分の力で回復し、この写真のように「黄色」や
「茶色」の斑点に変わるそうです。
これが「健康な稲」の証拠なんだそうです。



さて、室内でのお勉強が終わって「みんなの田んぼ」の生育状況を見てみます。
見ての通り、「分けつ」は2～3本で、めざす30本とはほど遠い状態です。
背も、全ての分けつが終わるまでは30～40cm位がいいそうですが、ヒョロヒョロと
伸び、
50～60cmが中心です。

臼井さんの説明では、連日の「注水」で「水温が低すぎる」のだそうです。

「分けつ」は、一定の水温を超さないと生じないので、どうしても数日間は水を温めてやる

必要があるとといいます。

今の状態では、あまりにも弱々しく、病気や虫にも負けてしまい、とても可哀想だといいます。

弱ってしまったら、くすり（農薬）で治してあげるのも愛情の一つなのでしょう。

どうしても無農薬で育てるならば、出来る限りの健康的な育て方が前提になるそうです。



それでも、「みんなの田んぼ」を探してみると、なんとか5～6本に「分けつ」している稲に

出逢うことが出来ました。

葉の幅は細く、まだ6mm程度のものもあり、これでは1本で60粒程度、全体で300粒位で、

3000粒からみれば、1/10というはかなさですが、これからが楽しみです。

さて、行事の参加者が帰って、スタッフが後片付けをしていると・・・



一組のトンボがやってきました。（見つけにくいので矢印を付けました）

上にいる青いトンボが「オオシオカラトンボ」の「オス」です。

下にいる黄色いトンボが「オオシオカラトンボ」の「メス」です。



「オス」は、ほぼ水平飛行しているのに、「メス」は時々垂直に立つような格好をします。いったい何をしているのでしょうか。



しかも「メス」は、水面すれすれに飛行していることも多いのです。なにか訳がありそうです。



そして、ようやく捉えた渾身の一瞬です。

「メス」が水面を強く激しく打って、尾の後ろには波紋が出来、尾の前には水滴が飛んでいます。

これが「オオシオカラトンボ」の「産卵」の瞬間です。

水を強く打って行うので「打水産卵」と言われます。

「打水」と呼ばれる訳が、良く判ります。



「メス」が「打水産卵」をしているあいだじゅう、オスはそのそばでウロチョロしています。

これは気をもんでいる訳でなく、メスの産卵に邪魔が入らないよう「産卵警護」をしているのです。

オスとメスの色の違いを見て、「青くて美しい色をしている方がオスなんだよ」と、

「オス＝美しい」論で説明する人が多くいます。
私はこの「呑川レポート」で、今までいくつかの事例をあげ、「一般的にこう言われている」という
「一般論」の危うさと、それで割り切ってしまう「思考停止」に危惧を抱いてきました。
この「オオシオカラトンボ」の色についてもそれが言えます。

オオシオカラトンボにも天敵はいます。
この時期、繁殖期を迎える野鳥たちは、トンボなどたくさんの虫を食べる怖い存在です。

オオシオカラトンボは、「産卵」を首尾良く終わらせるためには、目立たない存在でなければなりません。
だから「メス」は、水面の色、土の色にとけ込むような、黄色と黒の混じった地味な色をしているのです。

そして「オス」はといえば、野鳥にとって目立つ色、青い色をして、動き回り、「食べるなら、ボクを食べて！」と
身を挺して「産卵警護」をしているのです。
トンボには、ツノも無ければ、キバもありません。
戦う武器を持たないオオシオカラトンボの「オス」は、目立つ色でしか「産卵警護」が出来ないのです。



これは「みんなの田んぼ」を囲うロープで、自分のテリトリーを監視するオオシオカラトンボの
「オス」です。
凜として、とても美しいと思います。

でもそれは、「オス＝美しい色」という単純で表面的なものでなく、身を挺してメスを守る
気高い精神がにじみ出た美しさなのだと思います。

「オスの方がきれいな色をしている」などという「一般論」は、ただ表面的な知識の取得
で、

「思考停止」をもたらし、その背景にある「オオシオカラトンボ」の生態、生きざまに想
いを寄せる

思考を止めてしまうのです。

「一般論」を振りかざすと、それで判ったような気持ちになって、

「同じシオカラトンボなのに、どうしてオスとメスは、色が違うのだろう？、その色はど
んな意味を

持つのだろう・・・」と考えをめぐらすことを排除してしまうのです。

でも、「オオシオカラトンボ」には、人間のとてもうれしい応援がありました。



りっぱなカカシが田んぼに立ったのです。（この左にも、もう1体が立っています）

このカカシが怖くて、「オオシオカラトンボ」の天敵である野鳥たちは、やって来られな
いかもしれません。

それは子どもたちが一生懸命作った、トンボたちへのステキなステキなプレゼントでした。

「オス＝きれいな色」という「一般論」で片付けず、その生態に目を向ければ、カカシを
立てた

その意味が、心に染みこんできます。

それが生きものを愛するという意味なのだろうと思います。

呑川レポート2011-21号
呑川工事稲の生長打水産卵

そして、トンボたちが居着いてくれれば、稲を食べる害虫もトンボたちが食べてくれ、健康な稲が育つのです。

みなさんご存じの、この「みんなの田んぼ」でも活動する寄立美江子さんが、ケガをされ、伊藤恵子さんがさっそくお見舞いをしてくださり、その様子を報告してくれました。それを聞いて、先日、私もガンの定期検診に行く時に、荏原病院の病室に顔を出しました。

寄立さんは、その表情こそ元気そうでしたが、腰から胸を覆う大きなコルセットをはめられ痛々しそうでした。

いろいろお話しをする内に、今まで4回も入院された大変な人生が語られました。そしてお孫さんへの熱い想いもほとぼり出ました。

その寄立さんに、最近うれしいことがありました。

3人のお孫さんの内、真ん中の娘さんが、この夏休みにアメリカから帰ってくると言うのです。

そしてそのお孫さんは、「おばあちゃんと一緒に、旅行しよう」と誘ってくれたそうです。なんとうれしい、楽しみなことでしょう。

でも、寄立さんがコルセットを外せるのは、あと4ヶ月先・・・夏休みの終わったずっと先です。

それを語る寄立さんの目には、大粒の涙が光りました。

「呑川の会」「六郷用水の会」「おおたく環境探検隊」「水路の会」の重鎮として寄立さんは活動されています。

とりわけ「水路」の研究者として、その働きはめざましいものがあります。

最近「呑川」につながる「水路」の調査に情熱を燃やされ、「呑川の会」の会報にも、白石さんと共に、連載予定のレポートを寄稿してくださいました。

一刻も早くお元気になり、また研究の最前線に立たれることを願ってやみません。

（呑川の工事の今後の展開に始まり、カカシ作りや稲の生長のこと、トンボの打水産卵のこと、寄立さんのこと・・・などついつい長くなってしまいました。

いつもテーマを一つに絞り、レポートの回数の方を多くしようと思うのですが、時間的余裕が無く、週に1回がせいぜいなので、ご了承ください。
今回もまた、配信先に都の河川部の2名の方が加わりました。)

-----photo essay by-----

高橋 光夫

〒145-0061 東京都大田区石川町1-26-8

(tel) 03-3727-8419 (fax) 03-3727-8505

(mail) mitsuo.takahashi@nifty.com
